

ラウンドテーブル

2023年9月24日(日) 13:45~15:15

場所：1号館2階 1201教室~1206教室
3階 1304教室~1306教室

場所	No.	企画者	タイトル
1号館3階 1306教室	1	眞榮城和美	地(知)の拠点としての大学地域連携活性化に向けて —東京都調布市の挑戦—
1号館3階 1305教室	2	梅永雄二	発達に特別な支援が必要な子の成人期支援 —大人になって幸せになるために—
1号館3階 1304教室	3	田中卓也	体験重視の視点を取り入れたさまざまな保育、教育実践を考える —子どもの自己肯定感をめぐって—
1号館2階 1206教室	4	所真里子	子育て/保育の安全と質は対立しない —安全を考えることは、育ちを考えること—
1号館2階 1205教室	5	高橋智	子どもは現在もコロナ禍の最前線にいる： コロナ禍後遺症と発達困難・リスクの動向
1号館2階 1204教室	6	高島麗子	当事者が語るギフテッドのリアル
1号館2階 1203教室	7	堀田博史	デジタル時代の子どもの育む担い手の学びの支援について —園・保育者・保護者を対象としたチェックリストと 動画教材の開発と評価—
1号館2階 1202教室	8	仁木和久	学びと成長に必要な「自己」と「主体性」の生物学的基盤 Enactive Brain —子どもの主体性を尊重・促進する教育への考察と提案—
1号館2階 1201教室	9	沢井佳子	子ども期からの生涯発達を支える「AI、XRを利活用した成育環境」 —VR等による認知拡張を 学びと行動変容に活かすには?—

【ラウンドテーブル1】

地(知)の拠点としての大学地域連携活性化に向けて —東京都調布市の挑戦—

企画・司会：眞榮城和美（白百合女子大学人間総合学部）

話題提供1：児島秀樹（グッドモーニング調布）

話題提供2：鶴間育将（グッドモーニング調布）

話題提供3：常廣大助（調布市せんがわ劇場）

話題提供4：櫻井拓見（調布市せんがわ劇場演劇ディレクター、調布市せんがわ劇場 DEL）

「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」（文部科学省，2015）が実施されて以降、高等教育機関には地域が求める人材を養成するための教育カリキュラムの構築・実施に資すること（文部科学省，2021）が求められ続けている。そこで本ラウンドテーブルでは、学会大会主催校である白百合女子大学のある東京都調布市を中心として、子育て・子育てに関わる活動を通じた人材育成について検討する。調布市は、東京都のほぼ中央にあり、世田谷区と狛江市、三鷹市、小金井市、府中市、稲城市に隣接している地域である。市のサイズは東京都の約1%、人口は約24万人、相互友好協力協定を締結している大学は白百合女子大学を含め7大学（市外大学は3校）となっている。今回は、「東京都調布市の挑戦」として、各話題提供者がこれまでの取り組みの一部を紹介し、フロアの皆様と一緒に「子どもまんなか」の学びと育ちを支える地域の在り方・高等教育機関の在り方について検討する。具体的な話題提供内容は下記の通りである。

話題提供1・2：グッドモーニング調布！（代表：児島秀樹氏・鶴間育将氏）

「調布に暮らす人々による地域プロジェクト」を展開しているグッドモーニング調布！の取り組みを通じた子どもたちの学びと育ち、地域住民との連携工夫、今後、高等教育機関に期待することについてディスカッションする。

話題提供2・3：せんがわ劇場の取り組み（調布市せんがわ劇場館長：常廣大助氏/調布市せんがわ劇場演劇ディレクター・せんがわ劇場 DEL：櫻井拓見氏）

せんがわ劇場の子ども対象ワークショップなどへの大きな反響は、仙川地域で増加している子育て世代から「場」が求められている実感となり、事業企画における大切な視点となっている。劇場では、かねてより白百合女子大学と子ども対象の事業に協働で取り組んでいる。今回は、ワークショップとパレード『おかしな家とおかしな鳥』を取りあげ、劇場という箱に留まらず、まち（地域）そのものを劇場空間と捉え、創造的かつ活力の源となるような交流の場として展開する事例を紹介する。

3氏による話題提供を受け、ラウンドテーブル参加者のみなさまとともに、「子どもまんなかの地域の在り方」についてディスカッションしていく予定である。

【ラウンドテーブル2】

発達に特別な支援が必要な子の成人期支援 —大人になって幸せになるために—

- 企画・司会：梅永雄二（早稲田大学教育・総合科学学術院）
話題提供1：縄岡好晴（明星大学人文学部福祉実践学科）
話題提供2：加藤健生（横浜市立港南台日野特別支援学校）
話題提供3：宮野雄太（早稲田大学）
話題提供4：高橋幾（早稲田大学）
指定討論：梅永雄二（早稲田大学教育・総合科学学術院）

文部科学省によると、通常の小中学校に在籍する児童生徒のうち 8.8%に学習面や行動面で著しい困難を示す発達障害の可能性があることが報告されている(文科省, 2023)。

また、知的障害はないものの定型発達といわれる知能指数の範囲が 85 に満たない、いわゆる知的ボーダーラインと考えられる人は人口統計上約 13.59%存在している。

このような子どもたちは、学校の勉強についていけないことを理由に、学校教員や保護者に叱咤され、クラスメイトからはからかわれるため、自尊感情が低下することが数多くの研究で報告されている。

その結果、学校に行くことが嫌になり、不登校、ひきこもりへとつながる可能性がある。さらには、非行に手を染める可能性も考えられる。

このような状態が成人期へと続くと、大人の引きこもり状態となり、仕事に就けないニート、たとえ仕事に就けたとしてもフリーターといった非正規雇用となるだけではなく、職場でのいじめからうつ状態となり、結果的に失業あるいは不安定就労といった経済的に厳しい状況が考えられる。

以上のような、発達に特別な支援が必要な子どもの成人期の自立を考えると、早期から彼らに合った支援をする必要があるものと考えられる。

よって、本ラウンドテーブルでは、話題提供として発達障害の子どもが通所している「放課後等デイサービス事業所」の段階で成人期に必要なライフスキルを確認する BWAP2 といった新しいアセスメントに基づいた実践報告、成人期を見据えたスキルと就労状況との関連についての最新情報、さらに特別支援学校に在籍している発達障害児に対するライフスキルの指導、そして成人期の社会参加の一つとして必要となる自動車運転免許取得のための自動車教習所におけるソフトスキルの支援について話題提供をお願いします。以上 4 名の話題提供者に対して、発達に特別な支援が必要な子どもたちが「大人になって幸せになる」ために、子どものときからどのような教育支援が必要かについて、指定討論を行う。

【ラウンドテーブル3】

体験重視の視点を取り入れたさまざまな保育、教育実践 を考える —子どもの自己肯定感をめぐって—

- 企画・話題提供 : 田中卓也 (育英大学)
話題提供1 : 杉山晶子 (聖学院大学)
話題提供2 : 川村高弘 (神戸女子短期大学)
話題提供3 : 田中路 (東京純心大学)
指定討論1 : 中島眞吾 (中部大学)
指定討論2 : 齋藤義雄 (東京家政学院大学)
司会 : 小川知晶 (川崎医療福祉大学)

本ラウンドテーブルでは、「体験重視の視点を取り入れたさまざまな保育、教育実践を考える—子どもの自己肯定感をめぐって—」について、保育および教育の観点からさまざまな研究専門分野の立場からご報告をいただくものである。自己肯定感とは子どもが諸処の場面状況などにおいて、さまざまな苦労や困難なことに立ち向かい、それを乗り越える力をいう。ところが昨今ではこの自己肯定感が弱い子どもたちが後を絶たない。自己肯定感を子どもたちが高めていくためには、どのようにしたらよいのか、どうすべきかについて保育、教育の視点から考えていくものである。

幼児期は、遊びを中心として、頭も心も体についても動かしながら主体的に、様々な対象と直接かかわりながら、総合的に学んでいくことが大切である。遊びを通して思考を巡らし、想像力を発揮し、自分の体を使って、また、友達と共有したり、協力したりして、様々なことを学ぶことがめざされることになる。

幼児教育施設と小学校との連携は、年々増加している。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示され、こども家庭庁の創設、「架け橋プロジェクト」の推進が叫ばれるようになった。保育5領域の言葉と言語能力の充実、コミュニケーション能力の向上、このことにより学びが育まれる過程が一樣ではなかったり、学びによって育まれる姿が多様であったりするため、幼児教育施設で育まれた力が小学校の教育にどのようにつながっているのかイメージしにくい。幼児教育の現場では、カリキュラムの参考になる資料が少ない、どのように作成すればよいのか分からないといったことが要因となって、接続期のカリキュラムがなかなか進まない。一つの園から複数の小学校へ入学する、一つの小学校に複数の園から進学するといった状況から、幼保小連携を効果的に進めることが難しい。経験の浅い保育者は、経験豊富な保育者に比べ、幼児は遊びを通してどのような体験をしているのか、幼児の体験が深まるように環境を工夫することができにくいといわれる。

音楽では子どもの遊び歌やわらべ歌などの身体表現や搜索を通じて、子どもたちと音楽を楽しめるような工夫や、幼児のリズミカルなことばや歌、動き、音などによる表現に気づき、ことばや音楽でのコミュニケーションなどが大切になってくる。さらに劇などの表現活動に至っても積極的に取り組む姿勢がみられなかったり、園や小学校で行う経験も少なくなっている印象を受ける。

子どもたちには失敗を恐れず、またがんばろうという意欲をもたらせるような教育や保育の取り組みが必要になってくると考えられる。

そこで本ラウンドテーブルでは、保育者養成、小学校教員養成を行う大学研究者の方々にこれまでのさまざまな経験から体験重視の保育、教育のあり方についてもギャラリーの方々と議論について交わしていきたい。

【ラウンドテーブル4】

子育て／保育の安全と質は対立しない —安全を考えることは、育ちを考えること—

企画・司会：所真里子（保育の安全研究・教育センター）

話題提供1：寺町東子（東京きぼう法律事務所）

話題提供2：掛札逸美（保育の安全研究・教育センター）

子どもが育つなかで、つまづく、転ぶ、滑るといったできごとを避けることはできません。ところが、こうした事故でケガが起これば、「なぜ見ていなかったのか」と保護者や保育者が責められ、遊びや活動を制限したり遊具等を撤去したりする対応がとられます。でも、「あれもダメ、これもダメ」の環境で子どもは育つことができるのでしょうか。

子育て／保育における事故は実にさまざまです。ケガが命を奪うことは稀ですが、命にかかわる事故もあります。まずは、命を奪うタイプの事故について保護者と保育者が理解し、防げる事故を防ぐ力をつけることが必要です。そして、この力は、「子ども」という存在の特徴を理解し、成長発達を支援する視点を持つことで身につけることができます。子どもの安全を考えることは、子どもの育ちを考えることなのです。

本ラウンドテーブルの企画者（所）は、知育玩具や通販商品の事故事例分析や国際的な子どもの安全基準「ISO ガイド 50」の JIS 規格化に携わるなど、モノや環境の面から家庭や未就学児施設の安全に取り組んでいます。見守りには限界があること、事故やケガを話題にあげやすい環境づくりの大切さについてお話しします。

話題提供者の寺町氏は弁護士、社会福祉士、保育士として未就学児施設での重大事故防止の活動に長年取り組んでいます。重大事故という出口から遡って致命的な事象を避けるための環境づくり、一人ひとりの子どもとの応答的でその子の特徴を踏まえた関わりの大切さ、「不適切保育」と重大事故は背中合わせだということについて実例をもとにお話しいただきます。

もう一人の話題提供者の掛札氏（心理学博士）は10年にわたり、社会・健康心理学における意識・行動変容の手法をもとに未就学児施設の安全を支援しています。ケガが命を奪うことは稀である点をデータから示した上で、事故を選り分け、子どもの命を守るためにおとなと社会全体がすべきことをお話しいただきます。

「あれもダメ、これもダメ」ではなく、子どもの「やりたい！」を促し、実現しつつ、死亡や重傷（症）、後遺障害につながるような深刻な事故やケガが起こらない子育て／保育の環境をつくっていく、このテーマに関心をお持ちの方、ぜひご参集ください。

【ラウンドテーブル5】

子どもは現在もコロナ禍の最前線にいる： コロナ禍後遺症と発達困難・リスクの動向

企画・司会：高橋智（日本大学）
話題提供1：田部絢子（金沢大学）
話題提供2：能田昂（尚絅学院大学）
話題提供3：内藤千尋（山梨大学）
話題提供4：石井智也（兵庫教育大学）
話題提供5：石川衣紀（長崎大学）
話題提供6：池田敦子（東海学院大学）

【企画趣旨】

COVID-19 は日本では「第5類」に移行したが、「子どもは依然として COVID-19 パンデミックの最前線にいる」ことを示す実態が国内外で多数報告されている（Höög：2022 ほか）。コロナ禍に伴う子どもの不安定な生活基盤、孤独・孤立、睡眠・生活リズムの乱れ、不安・抑うつ・ストレス等に関わる諸問題が大きく顕在化している。

パンデミック以降、後遺症問題が注目されている。感染者の罹患後症状（通称：Long COVID）だけでなく、感染の有無を問わずパンデミックという災害事象に伴う各種の影響拡大も重大問題である。本報告ではこれを仮説的に広義の後遺症として「コロナ禍後遺症」と名づける。具体的には「抑うつ、睡眠困難、生活リズム障害、起立性調節障害、学校の長期欠席、不登校、ひきこもり、虐待、自傷、摂食障害、自殺」等の子どもの発達困難・リスクが該当する。

コロナ禍後遺症は、時間差をもって発生することが想定され、子どもの社会的、行動的、教育的発達獲得に長期的影響を与える可能性が指摘されている（Buonsenso ほか：2021 など）。コロナ禍後遺症のなかでも子どものメンタルヘルス問題はすでに顕在化しているが、コロナ禍対応では社会経済システムが最優先であり、子どもの心身発達における深刻な影響については軽視されていると言わざるを得ない。コロナ禍に伴う子どものコロナ禍後遺症問題はほぼ未検討であり、早急に着手すべき課題である。

それゆえに本ラウンドテーブルでは、子どものコロナ禍後遺症のなかでもメンタルヘルス問題に焦点化して検討し、日本の子ども研究が引き取るべき課題を明らかにしていく。

能田昂ほか（2022）新型コロナ後遺症（Long COVID）と子どもの発達困難・リスクに関する研究動向、『尚絅学院大学紀要』84。

高橋智ほか（2023）北欧諸国における子どもの「コロナ後遺症」問題と発達困難・リスクの動向、『日本大学文理学部人文科学研究所紀要』106。

【ラウンドテーブル6】

当事者が語るギフテッドのリアル

企画・司会：高島麗子（保護者（小児科医/Gifted Online Homeroom 代表））
話題提供1：泊岩水月（当事者（アリゾナ州立大学在学中））
話題提供2：土居綾美（当事者（Co-Ring 代表））
座長：榊原洋一（お茶の水女子大学名誉教授）

「ギフテッド」については、昨今その突出した才能を取り上げられることが多くなり、日本社会においても徐々に知られるところとなってきた。ギフテッドに対する公的な教育支援の存在しない我が国においては、我が国特有の同調圧力も相まって、なおさら教育環境との不適合を起しやすという現状がある。このような背景のもと、文部科学省において、「特定の分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議」が行われるなど、教育支援の必要性について徐々に認識されるようになってきた。しかし、「ギフテッド」に対する理解は未だ非常に断片的であり、残念ながら当事者たちの声がないがしろにされていると言わざるを得ない。当事者にとって必要な支援を行うためには、ギフテッドにおおむね共通した問題を認識するだけではなく、ギフテッド各人の多様性の理解が欠かせないが、特に多様性については理解が進んでいないのが現状である。また、教育支援の必要性がようやく認識されてきた一方、欧米では教育支援と並び重要であるとされる情緒支援については、その必要性について未だほとんど認識は進んでいない。ギフテッド特有の繊細さや過敏さといった特性により、その多くが生きづらさを抱えているということが欧米の研究により明らかとなっており、実際に日本においても多くのギフテッドが生きづらさを抱えている。教育支援・情緒支援のいずれもが十分ではない環境において、学童期の教育環境との不適合は、教育の機会を逸するというだけでなく、二次的にうつ病などの様々な精神疾患を引き起こすことがわかっている。しかしながら、我が国においては医療機関における認知度がまだ極めて低いことから適切な介入に繋がらない場合も多く、希死念慮へと発展していく場合も少なくない。以上のような観点から、ギフテッド当事者たちの教育現場・医療現場でのこれまでの実際の経験を共有することが、適切な支援のためには必要不可欠であると考えられる。本ラウンドテーブルでは、複数の成人ギフテッド当事者の方に登壇して頂き、ご自身のこれまでの実体験をお話し頂く。『支援』の真の目的は、才能を伸ばすことではなく、あくまでも各人の幸福度を上げることであるという点には十分留意しながら、当事者にとって必要な支援につなげるための議論の場としたい。

【ラウンドテーブル7】

デジタル時代の子どもを育む担い手の学びの支援について —園・保育者・保護者を対象としたチェックリストと 動画教材の開発と評価—

企画・司会：堀田博史（園田学園女子大学 人間教育学部）
話題提供1：勝見慶子（明治大学 法と言語科学研究所）
話題提供2：佐藤朝美（愛知淑徳大学 人間情報学部）
指定討論：榊原洋一（お茶の水女子大学名誉教授、日本子ども学会理事長、CRN 所長）

デジタル化により幼児を取り巻く環境は変化している。OECD（2023）は、幼児教育・保育（ECEC）従事者にはデジタル時代の子どものケアと幸福をナビゲートするための新たな求が課せられており、そのための専門的な知識とスキルであるデジタルコンピテンス（DC）を学ぶ機会が必要である事を指摘している。ECEC従事者のDCには、就学以降と異なり、子ども中心の教育的アプローチや遊びを通じた学びを軸とし、デジタルテクノロジーを統合的に導入していくことが求められている。ECEC従事者は、子どもを情報の「受信者」にするのではなく、共にテクノロジーを使い、足場を作り、創造し、遊び、学んでいくパートナーとして接していかなければならないという。さらに、子ども達に安全なデジタル環境を提供できるスキルも持ち合わせると共に、保育業務でのICTの有効な活用方法を身につけていく必要がある。

このような多様なスキルが求められるECEC従事者の学びの環境として、科学研究費補助金・研究課題「幼児の遊びを止めない！幼児教育でのICT活用フレームワークの構築」（代表・堀田博史）では、園・保育者・保護者を対象に、各自の達成度を確認できるチェックリストと情報化推進のための動画教材を作成し、評価を行っている。

具体的には、園のチェックリストは、保育でのICT活用を進める中で、ICT環境がどの程度整備されているのかを確認する項目となっている。動画教材は、園のICT環境を整備するために気を付ける点に関する内容で、約10分の動画が12本という構成である。保育者のチェックリストは、保育者が情報活用能力をどの程度有していたらいいのかを確認する項目となっている。動画教材は、保育者の情報活用能力向上のために気を付ける点に関する内容で、約10分の動画が14本という構成である。保護者のチェックリストは、家庭において保護者が情報活用能力をどの程度有していたらいいのかを確認する項目となっている。動画教材は、保護者の情報活用能力向上のために気を付ける点に関する内容で、約10分の動画が6本という構成である。

話題提供者から、園・保育者・保護者のチェックリストや動画教材の具体的な内容とともに、評価結果についての報告を行う。現在進行形でデジタル化が進む環境において、子どもを含め、園・保育者・保護者が身に付けるべきDCのフレームワークを再考するとともに、支援の可能性について議論する。討論を通じてチェックリストや動画教材の一般公開など、今後の展開について検討を行う予定である。

OECD（2023）Professional development for digital competencies in early childhood education and care.

【ラウンドテーブル8】

学びと成長に必要な「自己」と「主体性」の 生物学的基盤 Enactive Brain —子どもの主体性を尊重・促進する教育への考察と提案—

企画・司会：仁木和久（元慶應義塾大学社会研究科）
話題提供1：仁木和久（元慶應義塾大学社会研究科）
話題提供2：安藤寿康（慶應義塾大学文学部）
話題提供3：緩利誠（昭和女子大学全学共通教育センター）

国内外の教育改革で盛んに強調され、重視されている子どもの「主体性」、「能動性」、「社会性」、さらには長期の教育期間、そして、その後の生涯に渡る「自己成長・発達」を支えている生物学的仕組みを脳科学的、行動遺伝学的に探求する。この成果を教育学に反映させる「脳科学と教育の架橋」研究を行い、主体的・能動的な「学び」と自己の「成長」の深い関係を明らかにすることにより、子どもの主体性を尊重・促進する教育のあり方を探り、提言する。

脳科学からは、主体的で能動的な人間の学びや行為を実現する積極的な脳 Enactive Brain の構造と機能の発達をとおり、環境に能動的に働きかける自己を形成し、行為主体性が生み出されることを示す。Enactive Brain の「自己脳システム」が抽象的・社会的自己と、環境対象に感覚・身体的に働きかける知覚的自己のペアとして構築され、その2つの自己脳の間で起こる相互作用ダイナミック現象を理解することで、行為主体性、能動的学び、自己と自己成長・発達とは何かを探る。

行動遺伝学からは、知能や学力だけでなくあらゆる能力に一人一人に固有な遺伝的素質があるという前提から行為主体的学習のための教育を論じ、特に、遺伝の影響があるからこそヒトは行為主体性という外界に対して能動的な学習をしようする存在であり、教育を主体的に利用し、文化的創造を可能にするという新しい遺伝観・教育観を示す。

教育学からは、積極的な脳 Enactive Brain に適合する学習環境デザインの実現に向けて、高校生を対象とする大規模な Web 調査の結果から「自己成長・発達」に影響を与える諸要因とその関係を探索的に分析することで、今後の展望と課題を考察する。

本企画は、科学研究費助成：挑戦的研究（開拓）「生涯に渡り変化するアクティブ・ラーニングの脳科学的アプローチによる学習理論研究」の成果に基づいている。JSPS 科研費 JP20K20337 の助成に感謝する。

【ラウンドテーブル9】

子ども期からの生涯発達を支える 「AI、XR を利活用した成育環境」 —VR等による認知拡張を学びと行動変容に活かすには？—

企画・司会： 沢井佳子 （[一社]日本こども成育協会）
話題提供1： 水野拓宏 （[株]アルファコード）
話題提供2： 石川翔吾 （静岡大学情報学部）
指定討論： 竹林洋一 （創造する心[株]）

【子どもの成育環境の一部を成す AI と XR】

一人ひとりの子どもの個性とニーズに基づいて、パーソナライズされた学びの環境をデザインしてゆくのに、有望な道具は AI と XR (eXtended Reality、Cross Reality) です。

昨年 2022 年後半に実用化された ChatGPT 等の生成 AI は、プロンプトに基づいて、テキストのほか動画や音声等の出力を生成する機械学習アルゴリズムの一種です。個々の子どもにふさわしい学習内容をカスタマイズし、学習の経路やスタイルを開発・選択する時の効率的な道具として、生成 AI は、今後の洗練と適切な利活用が期待されます。

また XR は、人間の認知機能を拡張し、世界観を広げるテクノロジーを表す包括的な総称であり、仮想現実 (VR)、拡張現実 (AR)、複合現実 (MR) が含まれます。VR ヘッドセットなどのウェアラブル・デバイスを介して、メタバースと呼ばれる「新たな現実世界」に没入することにより、人は、現実世界・デジタル世界・仮想世界が融合された環境において、思考し行動するという経験が可能になりました。そこでは、対人関係を築くこともでき、他者と経験や想像を共有するコミュニケーションの場が開かれ、視点を自由に移動させて動きながら考えるという、「認知拡張と行動変容の機会」がもたらされるのです。

このような生成 AI や XR は、子どもの遊びや学びのメディアに影響を与え始めており、すでに子どもの成育環境の一部となりつつあります。また、親世代をはじめ多世代が関わる地域の「成育コミュニティ」においても、AI を利活用した子育て相談チャットポッドや、没入型の視聴覚体験ができる VR 等は、大人が子どもの発達を学ぶメディアとして有望視されています。

【想像を飛び越える没入型体験が、生涯にわたり学びと発達を支える】

本ラウンドテーブルでは、没入感ある仮想体験を産み出す XR テクノロジーを開発している [株]アルファコードの水野拓宏氏と、情報学の研究者として、子どもから高齢者の発達研究に基づいたヒューマンインタフェース技術の開発に取り組む、静岡大学情報学部の石川翔吾氏に、子どもの成育環境や社会の学びに、AI と XR を利活用してゆくことの意義と事例についてご発表いただきます。また、人間中心のマルチモーダル AI・IoT 技術について永年にわたって研究を進め、みんなのケア情報学会の理事長でもある、創造する心[株]の竹林洋一氏には、指定討論者として、社会の学びの場や成育環境における 子ども・AI・XR の関係性はどのようなものであるかについて、議論を展開していただきます。フロアの皆さまの活発なご発言やご提言に期待しております。